平成２年度厚生省心身障害研究
「新生児期・乳児期の生活管理のあり方に関する総合的研究」

極小未熟児における初期栄養管理と身体発育に関する検討

（分担研究：新生児・乳児の栄養管理に関する研究）

研究協力者　山　口　規容子

要　約：極小未熟児における初期の栄養管理が、その後の身体発育にどのような影響を与えるかについて検討した。

極小未熟児AFD児では、経口による栄養摂取カロリーが、100cal ／kg／日に到達する日数が100日以上であると、その後の身長体重のcatch upに影響を及ぼす可能性が推定された。

すなわち、初期栄養摂取状況と、身体発育との関連性が示唆された。

見出し語：極小未熟児身体発育、初期栄養管理

研究方法：対象は当センターで管理した極小未熟児（出生体重1500g 未満）で、単胎出生、修正36カ月以上follow up、重度の神経障害をみとめない51例である。

極小未熟児をさらに出生体重1000g以上群（V群）1000g未満群（E群）とし、それぞれの群をAFD、SFDに分けて４群とした。

発育の評価は、昭和55年厚生省調査による乳幼児身体発育パーセンタイル曲線を使用し、10パーセンタイル以上の到達をcatch upとした。

初期栄養摂取状況に関しては、経口摂取カロリーが、100Kcal／kg／日に達した日数をもって比較した。

結　果：1.　４群における身体発育のcatch upの比較

V-AFD群（18例）が、4群の中で、最早いcatch upを示した。すなわち、修正６カ月で、体重は83.３%、身長は77.８%、頭囲は100%のcatch up をみとめた。これに対して、E-AFD群は、修正36カ月に到って、catch up率が、50%以上となったがE-SED群は、他の３群よりcatch upは低率で、体重はcatch up率36カ月で40%にとゞまった。

2.　４群間の初期栄養状況、経口摂取カロリー100Kcal/kg/日に達するまでの日数の比較

カロリー摂取が100kcal／kg／日に達した日数を4群間で比較すると、V-AFD群、54.８±32.３日、V-SFD群、25.０±25.１日、E-AFD群、93.１±36.０日、E-SFD群、71.４±40.９日で、V-SFDとE-AFDとの間に有意差をみとめた。

東京女子医科大学母子総合医療センター
Maternal and Perinatal Center,　Tokyo Women'S Medical College

3. 極小未熟児AFDにおける初期栄養摂取状況と身体発育

極小未熟児AFDにおいて、100kcal ／kg ／日に到達した日数が、100日以上群と、100日未満では、体重、身長が12カ月の時点でcatch upしない率において、100日以上群で有意に高率であった。

考　察：V群においては、とくにAFDの身体発育は非常に良好であった。

E群においては、AFD、SFDともに顕著な差はなく、catch upに時間を要することが認められた。

したがって、極小未熟児の身体発育に関して、V群とE群と区別したfollow upが必要と思われた。

初期栄養摂取状況については、100kcal までの到達は、V群、E群ともにSFDの方がAFDより短期であった。

極小未熟児AFDでは、初期の栄養摂取状況が、比較的早期に確立すると、その後の身体発育、体重、身長のcatch upに好い影響を与えることが推測された。

したがって、極小未熟児の栄養管理には、綿密な計画と、的確な配慮が必要と思われた。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:極小未熟児における初期の栄養管理が、その後の身体発育にどのような影響を与えるかについて検討した。
極小未熟児 AFD 児では、経口による栄養摂取カロリーが、100cal/kg/日に到達する日数が100 日以上であると、その後の身長体重の catch up に影響を及ぼす可能性が推定された。すなわち、初期栄養摂取状況と、身体発育との関連性が示唆された。